

登場人物

カムパネルラ

ジョバンニ

ザネリ

男の教師（宮沢先生）

女の教師（木野先生）

生徒たち

ジョバンニの母（声）

尼僧

大学士

その助手1

2

熊撃ちの小十郎

青年

少女かおる

ゴムボートの人々

車掌

子供たち

プロローグ——光の中で——

空気がちょうどそこいっばいの密度になったころ、舞台が光の中ち現れる。

そこは野外に設えられた教室だ。黒板と小さな机が一つ、それから椅子が幾つか並んで
いるだけの質素な青空教室だ。

そこだけは、ぼうつとほの白く明るい、辺りは夜とみえて、空には天の川が、この世界
の接線のように流れている。

誰くれない。……

ところへ、やってきた男がいる。白いシャツに作業ズボンをはいて、小脇に本を抱えてい
る。どうやらこの学校の教師のようだ。

彼は椅子の一つに腰掛けると、空を、というよりもあさっての方を見て呆感としている。

と、また一人やってきた者がある。今度はこの学校の生徒らしい。彼もまた小脇に教科書らしきものを抱えて、そんな服装をしているから。・・・
生徒が教師に声をかけた。

生徒 センセイ。

教師 ……

生徒 センセイ。宮沢先生。

教師 え？・・・

生徒 宮沢先生でしょ？

教師 はい。宮沢です。

生徒 カムパネルラです。

教師 (ポケットから眼鏡を出してかけるとカムパネルラを見た) ああ、カムパネルラ君じゃないか。どうしたんです？もう夜ですよ。

カムパネルラ 聞きたいことがあってやって来たんです。今夜は先生が宿直だと聞いてましたから。それで化学室の方へ行っただけです。そしたらお留守で、途中で小使いさんに来て、たぶんここだろうと聞いて、ここに来たんです。

教師 ああ、そうですか。

カムパネルラ 先生はここで何を？

教師 ちょっと考えごとです。(空を見た) たいへん星の美しい夜です。あれは天の川です。カムパネルラ君、銀河系の中心がどの辺りにあるか分かりますか？

カムパネルラ いいえ。

教師 あの辺りでしょう。さそり座の尾っぽの辺り。あの辺が銀河系の中心です。あれはもう南半球の星たちです。天の川にそって南に下ると、私たちの見たこともない星たちがあるのです。そんなことを思いながら、私はよくここで考えごとをします。というのも、実は今日大変な資料を手に入れてね、それはドイツの学者の大変な発見というか、科学理論なんです。theory of relativity 日本語に訳すと相対性理論というんです。それはね、私たちがこれまで絶対のものと思っていた空間やら時間やらを相対化してしまうものなんです。いままで絶対だと思われていた時間と、静かな空間とダンスを踊り始めたのです。そして唯一光こそが絶対なんです。(カムパネルラが虚渾としているの)・・・ああ、ごめんごめん。聞きたいことがあるんだったね。何ですか？

カムパネルラ センセイ・・・

教師 はい？

カムパネルラ ほんとうのこととは何でしょう？

教師 え？

カムパネルラ ほんとうのことです。

教師 ほんとうのこと？

カムパネルラ そうです。ほんとうのこととは何なのか、それを教えて下さい。

わたくしという現象はなんですか

ひとつの青い命ですか

ほんとうのことはなんですか
あらゆる透明な幽霊や
有機交流電灯の
せはしく灯り せわしく消えて
因果の果てに 失われる
ひとつの青い照明ですか
わたくしという現象はなんですか
ひとつの青い命ですか
ほんとうのことはなんですか
巨大に明るいつまの間の中で
灯る因果な電灯か
あるいは修羅の十億年
白亜の層に 埋もれたる
無色の孔雀の羽根ですか
わたくしという現象の
ほんとうのことはなんですか
それが知りたい
僕はそれが知りたいんです。

静かに暗くなり、二人、その中に溶けた。

1 授業

やがて夜があけて、空は次第に明るくなり、青く晴れわたり、夏の雲を浮かべ、日は高く昇った。

女の教師 では、皆さんは、このぼんやりと白いものがほんとうは何か知っていますか。

理科の授業らしい。眼鏡をかけた女の教師が写真を黒板にペタリと貼った。

青空教室の午後である。

生徒たちはその写真をよく見ようと首を伸ばす。ある者は立ち上がって背を伸ばす。

生徒 寝小便のあとじゃないか？

ザネリという名の生徒が戯れて言う。他の生徒もそれぞれ思っていることを口にした。

女の教師 ロ々に言っていないで、ほんとうに分かった人は手をあげなさい。

カムパネルラが手を挙げた。それから残りの生徒も手を挙げたので、ジヨバンニも手を挙げた。

教師 ジョバンニさん。

ジョバンニは立ち上がったが、答えられなくてモジモジしている。生徒たちがクスクス笑い始めた。ジョバンニはほんとうは疲れて居眠りをしていたのだ。

教師 大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう。

ジョバンニ (星だ。星なんだ。ああ、分かっているのに、どうして言葉がでないんだろう。)

教師 ではカムパネルラさん。

カムパネルラ はい・・・(と、立ったが、黙している)

教師 どうしました？カムパネルラさん。ジョバンニさんもカムパネルラさんも、きっと居眠りをしている夢を見たんですね。よろしい、このぼんやりと白い銀河を大きい望遠鏡で見ますと、もうたくさんのちいさな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。

ジョバンニ はい。

先生 カムパネルラさん、そうですね。

カムパネルラ はい。そうです。

教師 よろしい、二人ともお座りなさい。さて、それでは私たちはそれを確かめに行きましょう。宇宙船に乗ったつもりで、この地球から飛び出しましょう。

周囲は暗くなり、まるでプラネタリウムの中にでもいるように、ポツンとひとつ地球が映しだされた。

教師 これが私たちの住んでいる天体、地球です。地球は太陽を中心に回っている星の仲間に属しています。私たちは太陽のように自分で光をだして輝いている星を恒星と呼んでいます。

太陽系が現れた。

教師 太陽系です。

スライドが変わる。

教師 この円は半径一千億キロの円です。

太陽を中心にして円が描かれている。

教師 私たちの宇宙船の速度は光の速度です。ですからこの円の端まで百時間でこられます。でも、まだ銀河はおるか、別の恒星にすら宇宙船はとどきません。

太陽系は点になって、それを中心に三重の円が描かれている。

教師 私たちのロケットは地球の時間で一年飛びつづけました。この外側の大きな円が半径十兆キロ、およそ一光年の距離です。まだ恒星は姿を現しません。

点となった太陽系を中心に五光年ごとに円が描かれる。いちばん外の円は半径五十光年の円だ。スライドはやつと恒星の点在するを見せる。

教師 円は半径五光年ごとに描かれています。やつと恒星が見えました。

カムパネルラ ケンタウルスだ。

教師 そうですケンタウルスです。眼が醒めたようですねカムパネルラさん。十光年のところにあるのは、シリウスです。それから地球からは銀河をはさんで見える織り姫と彦星、ベガとアルタイルがこれです。でも、肝心の銀河らしきものはまだ見えません。私たちはもつともつと飛びましょう。

雪の散在するようなきまが映る。太陽系を中心に描かれた円は半径五千光年となった。

教師 この円の半径は五千光年です。雪のようにキラキラと星々が見えてきました。さらにもうひとつ飛び。

スライドは銀河の渦を映している。

教師 これが銀河系です。

スライドが銀河系を横から見せる。

教師 銀河系を横のほうから見ると、ほら、麦藁帽子を二つ合わせたように見えますね。私たちの太陽系は、この銀河の中心から約三万光年外よりのところにあると推定されています。これが天の川の実際の姿です。

ジョバンニ 先生、もつと飛んでいくとどうなるのですか。

教師 おやおや、ジョバンニさんもうやら眼が覚めたようですね。さて、どうなるでしょう。カムパネルラさん、分かりますか。

カムパネルラ アンドロメダ銀河が見えてくると思います。

ジョバンニ そうだ。僕もそう思う。

教師 では、地球の時間で二百万年、光の速度でとんでみましょう。

銀河系を中心にアンドロメダ銀河が現れた。

教師 アンドロメダ銀河です。光がアンドロメダを離れて、地球にとどくの二百万年か

かります。ですから私たちが現在望遠鏡で見ているアンドロメダの姿は、ほんとうは二百万年昔のものなのです。その頃地球にはオーストラロピテカスと呼ばれる化石人類が直立二足歩行をしていたことが分かっています。直立二足歩行、すなわち、立って歩くことによつて人類はサルからヒトになったのです。それが二百万年前です。今見ることのできるアンドロメダの宝石箱のような輝きは、実はそのころ、あたかもヒトの誕生を祝福するかのようによつてアンドロメダから放たれた光なのです。

ジョバンニ 先生、この宇宙には、僕たちと同じような宇宙人がいっぱいいるんですね。そうだよな、カムパネルラ。

カムパネルラ ああ、天文学者の話だと、地球のような天体は銀河系の中だけでも十億個くらいあるらしいんだ。だからその中から特に条件のいいのだけを取りだしても、十萬個くらいは生物がいるだろうって、そういつてるよ。

ジョバンニ 十萬個・・・

生徒たちはそれぞれ「十萬個」とつぶやきながら、あるものは溜息をもらした。しかし、女の教師は静かに、弥勒のように微笑んで、

教師 残念ながら、そうではありません。

プラネタリウムは一瞬に消えて、また青空がその明るさを取り戻した。

カムパネルラ 先生、

教師 はい。

カムパネルラ そうではないって、どういうことですか？

ジョバンニ 宇宙人、いないんですか？

教師 そうです。

ジョバンニ ええ、じゃあ、カムパネルラのいったことは嘘なんですか。

教師 いいえ、カムパネルラさんの言ったことは嘘ではありません。天文学者の多くは、カムパネルラさんのいったように考えています。でも、私のような生物学者はそうは考えていないのです。生物学者の殆どは、この宇宙には地球以外に生物はいないだろうと考えています。

カムパネルラ どうしてですか。宇宙はあんなに広いのに。

教師 いくら廣くても駄目です。

カムパネルラ どうしてですか。

ジョバンニ どうしてですか？
教師 分かりやすくお話するために、私たち人間のような生物を一冊の本だと考えましょう。本を印刷するには印刷所がいります。活字が必要です。そうですね、ジョバンニさん。

ジョバンニ はい。僕、印刷所に仕事いつてます。だから、そうです。分かります。教師 この宇宙を巨大な印刷所だと考えましょう。

印刷所がいくら広くとも、活字の種類や数が少いと、本はできません。

たとえ活字がいっぱいあっても、出鱈目にならべていては、言葉になりません。

そこで私たちのような本を作るのには、九十二種類の活字をいろいろ取り出しては組み合わせ、また取り出しては組み合わせして、選択して適切な言葉にならびかえる作業が必要だとします。

九十二種類の活字というのが元素です。

私たちの計算では、生物を生み出すのに必要な、

選択の回数は、十の四十乗回。

カムパネルラ 十の四十乗。

教師 そうです。十の四十乗。

百億の百億倍の百億倍のまた百億倍。

そうしてやつと一冊の、私たちという本ができたのです。

宇宙の年齢は百五十億年です。それを秒で換算すると十の十七乗秒です。仮に一秒間に十の二十乗回活字をならびかえたとします。それでも十の四十乗回の選択数にはおよばないのです。つまり、本を一冊つくるにはまったく時間が足りないのです。

また、活字、つまり元素の量もそんなにはないのです。

カムパネルラ それでは、足りない時間と活字の数でどうして僕たちのような、一冊の本が出来たのですか。

教師 地球はそれをわずか十億年でやってしまったのです。これは奇跡としか言いようがありません。このような奇跡が宇宙のあちこちで起こることは、確率からいって考えられません。これが私ども生物学者が地球以外に生物の存在を認めない根拠です。

カムパネルラ すると、僕たち地球人以外に、この宇宙には生物はいないのですか。

教師 いません。

ジョバンニ そいじゃあ、UFOは？

教師 ありません。

ジョバンニ でも、僕、UFO見たよ。

教師 きつと寝惚けていたのでしょうか。

生徒たちはキツネにつままれたような顔で、互いを見た。終業の鐘が鳴る。

教師 今日はこれで終わりです。今夜は星のお祭りでしたね。運河に行くひとは気をつけて下さい。船の上ではしやぎ過ぎて落ちたりしないように。

生徒たち はい！

起立、礼・・・

教師も生徒たちも教室を出ていったが、カムパネルラは残って黒板に書かれた数字を見ている。そんなカムパネルラにジョバンニが竹箒を渡しながら声をかけた。

ジヨバンニとカムパネルラが青空教室を掃除し始めた。雑草をひっこ抜いたり、竹箒でゴミを掃いたりだ。

ジヨバンニ 僕さあ、やっぱり宇宙人いると思うな。ねえ、カムパネルラ、僕ほんとうにUFO見たんだよ。

カムパネルラ UFOに宇宙人が乗ってるとは限らないよ。

ジヨバンニ あ、そうか・・・じゃあ、何が乗ってんのかなあ？

カムパネルラ やっぱ、宇宙人かな。

ジヨバンニ ええ、どっち？

カムパネルラ 宇宙には、僕たちの知らない生物がいっぱいいるような気がする。

ジヨバンニ 火星にだっているよねえ。

カムパネルラ 火星には火星の環境に適した生物がいるさ、きつと。

ジヨバンニ 金星にだっているよねえ。

カムパネルラ 金星には金星に適した生物がいるんじゃないかな。

ジヨバンニ そうだよねえ。

カムパネルラ だって、地球にいるのは人間だけじゃないんだもの。犬や猫だっているし、鳶や鷲や鷹もいるし、

ジヨバンニ 狐や熊や栗鼠（りす）もいるし。

カムパネルラ 兎や猿や猪もいるし。

ジヨバンニ 象や馬や羊もいるし。

カムパネルラ チョウチョや蜻蛉や蝉もいるし。

ジヨバンニ 河童や・・・河童、いるかな？

カムパネルラ 河童かい・・・うーん。

ジヨバンニ いるよねえ。

カムパネルラ いるさ。

ジヨバンニ 蛙や蛇や亀いるよ

カムパネルラ 蓑虫に蜘蛛に蠅螂（かまきり）いるし

ジヨバンニ カモモンガにムササビにフクロウいるよ

・・・あつ、いない。

カムパネルラ え？

ジヨバンニ ザネリ、いない。

カムパネルラ ザネリ？

ジヨバンニ ザネリ、今日掃除当番だぞ。（キョロキョロと）

カムパネルラ いた！あそこ。

ジヨバンニがこっそり帰ろうとしていたザネリを引っ張ってきた。

ジヨバンニ ずるいぞザネリは。

ザネリ 何だよ。忘れてたんだよ。お祭だから、忘れてただけだって。

ジヨバンニ 掃除しろ。

ザネリ するよ。

ジョバンニ おい、ザネリ、お前言ってみろ。

ザネリ 何を？

ジョバンニ 宇宙にいる生物言ってみろ。

ザネリ 何だよ。知るかよ。

カムパネルラ 身近にいるのじゃ駄目だぞ。

ジョバンニ そう。身近にいるのはもう僕とカムパネルラとで全部言っちゃったからね。

ザネリ 宇宙には生物いないって、先生言っただじゃないか。

カムパネルラ ほんとのことは分からないよ。調べたわけじゃないんだから。

ジョバンニ 早く言えよ、宇宙にいる生物。

ザネリ よーし、それじゃあ、とっておきの言ってみよう。

ジョバンニ 言ってみろ。

ザネリ ラッコ。

ジョバンニの顔が少しくもる。

ジョバンニ (ごまかしの必死の冗談) ラッキョか。・・・

ザネリ ラッコだ。お前、頭だけでなく耳も悪いのか？ジョバンニ、お父さんから、ラッコの上着が来るぞ。どうだジョバンニ、お父さんから、ラッコの上着はもう来たかい？やーい、バカヤロ、掃除なんかしねえぞ。俺は帰って祭りの準備だ。御馳走あるぞ。お前はなんだ、これから仕事か。活版所で活字ひろって、おっ母さんに乳買ってやれよ。そのうちお父っつあんからラッコの上着が届くんだよな。ひっひっひ。やーいラッコだ、ラッコだ。

ジョバンニ 何だと！(箒を振り上げた)

ザネリはお尻ペンペンして逃げて行った。

カムパネルラは黙って掃除をしている。

ジョバンニ (静かに箒をおろす) ラッコ、もうじき来るよ。

カムパネルラ ジョバンニ、今日、僕ん家来いよ。また天文学の本見ようぜ。

ジョバンニ (だまって掃いている)

カムパネルラ 銀河の写真見ようぜ。ドブソニアン望遠鏡の写真もあるし。

ジョバンニ (黙って・・・いや、口の中で小さくラッコの上着と呟いている)

カムパネルラ・・・君の父さん、すぐに帰ってくるさ。きつともうじきに、帰って来るさ。僕の父さん言ってたもの。ジョバンニの父さんは少しも悪くないんだって。

ジョバンニ・・・

カムパネルラ あっ！

ジョバンニ え？

カムパネルラ 見ろよジョバンニ、あんなところを汽車が走っている。

ジョバンニ ええ？何処お、見えないよ。

カムパネルラ ほら、あの天気輪の丘の上。
ジョバンニ (首をひねる) あそこ、鉄道なんか、あったっけ？
カムパネルラ こんなやみよのはらのなかをゆくときは・・・
ジョバンニ え？

カムパネルラ (夢みているように)

こんなやみよのはらのなかをいくときは

客車のまどはみんな水族館の窓になる

ジョバンニ カムパネルラ何言ってるの？

カムパネルラ 乾いたでんしんばしらの列が

せはしく遷(うつ)っているらしい

きしやは銀河系の玲瓏レンズ

大きな水素のりんごのなかをかけている

りんごのなかをはしっている

けれどもここはいつたいどこの停車場だ

けれどもここはいつたいどこの停車場だ！

何処かでたしかに汽車が蒸気を吹いた音がした。

暗転

3 家

ジョバンニの家。机には質素だけれど小奇麗なテーブルかけがかけられている。

そしてその上には手鍋がひとつ、トマトを盛った籐籠がひとつ、ナプキンをかけられて置かれてはいるはずだ。

ジョバンニ お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪くなかったかい？

そして始まるジョバンニとその母の会話を私たちは、すべて聞き取ることとはできない。母の声はジョバンニにだけ聞こえている。私たちにはそれは音楽の旋律として聞こえている。その旋律から私たちは母の喋った言葉を想像することになる。

ジョバンニ お母さん、今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。

母 『—————』

ジョバンニ お母さん、姉さんはいつ帰ったの

母 『—————』

ジョバンニ お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。

母 『—————』

ジョバンニ ぼく行つてとつて来よう。

母 『—————』

ジョバンニ では、ぼく食べよう。……………(トマトを食べながら) ねえお母さん、

ぼく、お父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ。

母『——』

ジヨバンニ みんなぼくにあうとそれを言うよ。ラッコの上着はまだかいってひやかすんだ。今日も活版所の帰りにザネリたちに言われた。ザネリのやつは学校でも僕をいじめたよ。

母『——』

ジヨバンニ うん、けれどもカムパネルラなんかけして言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ。

母『——』

ジヨバンニ カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、小さいときから友達だったんだろ。

母『——』

ジヨバンニ ぼくは学校から帰る途中によくカムパネルラの家に行ったよ。父さんがいた頃ね。あの頃はよかったな。．．．カムパネルラの家にはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなってそれに電柱や信号標もついていた。信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、罐がすすけたよ。

母『——』

ジヨバンニ いまも毎朝、新聞を配りにいくよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな。

母『——』

ジヨバンニ ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻をならしてついて来るよ。ずうっと町の角までついてくる。もつとついてくることだってあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを運河にながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。

母『——』

ジヨバンニ うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。

母『——』

ジヨバンニ ああ、ぼく岸から見ただけだ。川にははいらない。僕 一時間で行ってくるよ。きっかり一時間たったら 帰ってくるよ。たったの一時間さ。すぐに帰ってくるよ。母 もつと遊んでおいで。(ここで私たちは初めて慈愛に満ちた母の声を聞く)

ジヨバンニ では一時間半で帰ってくるよ。一時間と半で帰ってくるよ。それくらいなら、いいよね。うん きつとそうするよ。ごちそうさま。

ジヨバンニは食べ物をかたづけして戸口に立った。

暗転。

ジヨバンニは淋しく口笛を吹きながら、自分の長い影法師と一緒に歩いている。すると、影法師がひとつ増えた。カムパネルラが立っている。

ジヨバンニ カムパネルラ。

カムパネルラ ジヨバンニ、運河のほうに行くんだろ。

ジヨバンニ ああ、行ってもいいんだけど、その前におっ母さんの牛乳をとりに行かなければいけないんだ。

カムパネルラ ねえ、ジヨバンニ。天気輪の駅で待っていてくれないか。

ジヨバンニ 天気輪の駅？

カムパネルラ うん

ジヨバンニ カムパネルラ、汽車に乗るのかい。

カムパネルラ 天気輪の駅で待ってておくれよ。

ジヨバンニが首を傾げると、

カムパネルラ ねえ、ジヨバンニ。ほんとうのこととは何だろうね。

ジヨバンニ え？

カムパネルラ ほんとうのことさ。

ジヨバンニ ほんとうのことって？

カムパネルラ ああ、そうだ。いいものがある。(肩さげ鞆から星座表を出した) ござらんよジヨバンニ、星座表だよ。

ジヨバンニ ああ、ほんとうだ。学校にあるやつより小さいねえ。どうしたんだい？

カムパネルラ 買ったんだよ。角の時計屋に売ってたをね。

ジヨバンニ へーえ。

カムパネルラ 蛇や魚や瓶や白鳥や、それに蠍や、それからこれは何だろう。不思議な獣だねえ。ほらござらんよ、いっぱいいるんだ。それにはこんなのが、ぎっしりいるんだよ。

ああ、こんなそらを、どこまでも歩いてみたいねえ。

ジヨバンニ うん、そうだねえ。

カムパネルラ ケンタウルス、露をふらせ。

ジヨバンニ ケンタウルス、露をふらせ。

カムパネルラ これ、預けておくよ。きつと持ってきてくれよ。

ジヨバンニ え？・・・ああ、分かった。きつと行くよ。

ジヨバンニはカムパネルラの髪が濡れているのに気がついた。

ジヨバンニ カムパネルラ、

カムパネルラ ？

ジヨバンニ 髪の毛が濡れてるよ。

カムパネルラ あ、これかい、きつとケンタウルスがふらした露に濡れたんだよ。

ジヨバンニ (怪訝ながらも頷いた)

カムパネルラ それでは、ぼくは運河に行く。ジヨバンニ、天気輪の駅で待っていておくれよ。

ジヨバンニ うん。

カムパネルラ きつとだよ。

星座表をジヨバンニの手に渡すと、カムパネルラは行ってしまった。
見送って、ジヨバンニは星座表を見ている。

ジヨバンニ ケンタウルス、露をふらせ。・・・ケンタウルス、露をふらせ。

星座表が眩しく光ってジヨバンニの顔を浮かびあがらせている。

子供たちが烏瓜を棒の先にぶら下げて歩いて来た。『ケンタウルス露をふらせ』を歌いながら。

『ケンタウルス露をふらせ』

コーラス^η星のまつりの夜は

星座表から 星が空に還る

白鳥は舞い 鷺は飛び

琴は奏でる

ケンタウルス露をふらせ

子供たちの髪を濡らせ

星のまつりの夜は

星座表から 星が空に還る

天秤はゆれ 竜はうねり

冠はかがやく

ケンタウルス露をふらせ

子供たちの髪を濡らせ

うしかいは歩き 射手は打ち

蠍ははねる

ケンタウルス露をふらせ

子供たちの髪を濡らせ

ケンタウルス露をふらせ

ケンタウルス露をふらせ

ケンタウルス露をふらせ

ケンタウルス露をふらせ

——銀河ステーション、銀河ステーション。

という声が出たかと思うと、満天の星の光の下に駅の待合室が現れる。すでにカムパネルラがジョバンニを待っている。

ジョバンニ　なんだ、カムパネルラ、先に来てたんだね。

カムパネルラ　みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。

ジョバンニ　もどつてみようか。

カムパネルラ　ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えに来たんだ。ああ、しまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳もだ。

ジョバンニ　お客は僕たちだけかい。さっきね、牧場の女の人が今夜は汽車はないなんていつてたよ。

カムパネルラ　そんなことはないよ。ジョバンニ、君、汽笛聞こえなかった？

ジョバンニ　ああ、聞こえたよ。

カムパネルラ　いまごろ、何処を走ってるのかな。

ジョバンニ　この星座表は線路がかいてあるね。

カムパネルラ　銀河鉄道の地図さ。

ジョバンニ　へーえ。

カムパネルラ　天の川の左の岸に沿って南へ南へ走っていくんだ。

ジョバンニ　その汽車、ここにくるのかい。

カムパネルラ　そうだよ。だってここは銀河ステーションだもの。

ジョバンニ　えっ？へーえ、天気輪の丘は、いつのまに停車場になったんだろう。

カムパネルラ　星祭りの夜はここは銀河ステーションさ。見てごらんよ、まわりの景色だつていつもと違うだろ。

ジョバンニ　ああ、ほんとうだ。あれ、すすきだね。銀いろだ。

カムパネルラ　月の光でないよ。銀河の光に反射して明るいんだ。

ジョバンニ　なんだか、みんな光ってるよ。

カムパネルラ　銀河がすぐそばにあるからだよ。

ジョバンニ　手をのばせばとどくかな。

カムパネルラとジョバンニは手を伸ばしてみた。

カムパネルラ　すきとおって、すきとおって、ガラスよりも水素よりもすきとおってるんだ。

ジョバンニ　冷たくないね。キラキラとしているね。

カムパネルラ　ごらん、りんどうの花が咲いている。

ジョバンニはカムパネルラの指差すほうを見た。

それから、どちらからというでなく、学校で習った『りんどうのうた』を静かに歌い始め

た。

☆『りんどうのうた』（注：作曲、北村 想）

りんどうの花 りんどうの花

咲いている ゆれている

むらさきの

りんどうの花 りんどうの花

6 尼僧

カムパネルラ おっかさんは、ぼくをゆるしてくださいだろうか。ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸せになるのなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのほんとうの幸せなんだろう。

ジョバンニ ……カムパネルラ、きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないか。

カムパネルラ ぼくわからない。けれど、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸せなんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるしてくださいと思う。だって僕はほんとうのことをしたんだもの。

ジョバンニ カムパネルラ、何か、あつたのかい？

カムパネルラ 僕はほんとうのことをしたと思う。でも、人間は何故死んでしまうんだろう。

ジョバンニ カムパネルラ……

カムパネルラ どうして、人間は死んでしまうんだろう。

と、——「いいえ」という女性の声があった。

ジョバンニとカムパネルラは『いいえ』という声のしたほうを見た。いつの間にか尼僧が立っている。

尼僧 人間は死ぬのではありません。天国に召されるのです。

カムパネルラ who are you？

尼僧 私は車を待っています。サウザンクロスまで行くのです。

ジョバンニ アーメンの人だ。

尼僧は大声で聖書を読み始めた。

カムパネルラ 天国に召されるって、それはあなたが尼さんだからでしょう？

尼僧 いいえ、人間はすべて、みんな天国へ召されます。

カムパネルラ それはあなたの宗教を信じている人々のことでしょ？

尼僧 いいえ、どの人間もみんなです。

カムパネルラ あなたの神さまを信じてない人もみんなですか。

尼僧 そうです。

カムパネルラ どうしてですか。あなたの神さまを信じていない人をどうして、あなたの神さまはお救いになるのですか？

尼僧 それは、とても簡単なことなのです。

カムパネルラ 簡単なこと？

尼僧 そうです。それは、そのように神さまがお決めになったからなのです。簡単なことですよ？

カムパネルラ あなたのような、信者でなくともですか。

尼僧 はい。

カムパネルラ それなら、何故あなたはそんなふうな尼さんになったのです？僕はあなたがたが尼になったり、牧師になったり、信者になったりするのには、天国へ行ける特権をもらうためだと思っていました。

尼僧 特権などというものは誰にもありません。私が尼僧であるのは、ただ、いま言ったように、すべての人々はみなゆるされて天国へ召されるのだという真実を、伝え述べんがためです。神のみまえでは、私もあなたもみな等しく同じなのです。そうして、誰もが救われて、神の国へといくことは、もう、あなたにとつても、あなたが生まれる前から決められていることなのです。ですから、人間は死ぬのではないのです。

ジョバンニ ほんとかな。

尼僧 ほんとです。

ジョバンニ 天国はあるんですか？

尼僧 はい。

尼僧はにこにこ微笑んでいる。ジョバンニとカムパネルラは怪訝そうだ。

尼僧 計算の上ではこの宇宙に生命の誕生することは、確率上ほとんど不可能に近いのです。つまり、この世界が存在することすら奇跡であるのです。

ジョバンニ あっ、その話、昼間の授業で聞いたのと同じだ。

尼僧 その奇蹟の世界を今、あなたがたはその眼で（と、ジョバンニの眼を指し示し）その眼で（とカムパネルラの眼を指差して）見ているではありませんか。なのに、どうして同じ眼で天国が見られないことがありますか。

カムパネルラ （ちよつと意地悪く）じゃあ、地獄もあるんですね。

ジョバンニ 悪いことをしたら地獄へ行くんだ。

尼僧 天国や地獄は人のおこさない帳尻をあわせるためにあるものではありません。なぜなら、良いおこないは、良いおこないそのものの中に報いがあり、悪いおこないは悪いおこないそのものの中に報いがあるからです。

カムパネルラ では、天国と地獄は何のためにあるのです？

尼僧 天国にはやすらぎが、地獄には冒険があります。

尼僧は楽しそうにジャズをスイングし、踊りだした。

尼僧 ♪ みんなで天国へいこう

天国はとってもいいところだよ

誰もみたことはないけれど

誰でもいけるところだよ

誰でも知っているとろさ

みんなで天国へいこう

天国はみんなのためにあるところだよ

天国はすぐそこにある

歌をうたいながらいけるよ

ダンスをしながらいけるよ

みんなで天国へいこう

みんなで天国へいこう

みんなで天国へいこう

みんなで天国へいこう

8 発掘の人々

すると、大学士がつるはしとスコップを持った二人の助手を連れて現れた。

学士 うーん、頭が痛い。と言っても頭痛じゃないんだ。うーん、頭が痛い。これはまあ困っているという譬喩（たとえ）だ。うーん、頭が痛い。おい、助手、お前らはこの辺を掘ってる。ああ、これはどうも、アーメンの方ですね。尼さんだ。それに少年が二人。うーん、頭が痛い。といつてもこれは譬喩なんだが。うーん。

尼僧 何かお困りのようですね。

学士 あなたはどちらまで？

尼僧 サウザンクロスまでです。

学士 ほう、サウザンクロスね。私はプリオシン海岸まで発掘の仕事に行くのですが、うーん、頭が痛いなあ。というのも、実は、考古学とはまったく関係のないことなんです。いや、学問のことなら、頭なんぞ痛くはならないんです。うーん。

ジョバンニ どしたのかな。

カムパネルラ さあ？

学士 というのは 税金のこと

たまんないな 面倒くさい

必要経費がわからない

いったいなにが 接待費

いったいどれが 消耗品

福利厚生 交通費

資料費 取材料 減価償却

いったいなにがどれなんだ

たまらないな頭が痛い

帳簿もつけなきゃならないんです。私は考古学の学士ですよ。こんなことに時間をとられたくないんです。ゼーンぶ研究費でいいじゃないですか。

学問上のひらめきが

一杯のコーヒーからやってくる

そんなことも日常しばしば

それではそれはいつたい ナニ費

私はそういうことを考え始めると、ズーっと、ズーっと一日中考えちゃうんです。

ああ、頭が痛い。ほんとに痛え。おいアスピリンだ。

助手が学士にアスピリンを渡し、学士はそれをバリバリと嚙んで飲んだ。

尼僧 税理士をお雇いになれば？

学士 え？

尼僧 税理士の先生を雇えばいいんじゃないですか？

学士 !ああ、そうか。何でそれに気がつかなかったんだろう。アスピリンなんて飲んで損したな。税理士に領収書を渡せばいいんだ。こんな山のようになった紙の束を渡してやろう。そうしたら彼はその領収書の山を発掘するだろう。それは必要経費の考古学といえなくもない。ところで、あなたのような宗教者の必要経費って何なのかな。

尼僧 ?

学士 人間をお救いになるんですよ。一度見てみたいもんですね、人間を救うための必要経費の内訳を。ところで、少年たち、いいものを見せてあげよう。きたまえ、こわがらなくともよろしい。私は税務署じゃない。考古学士だ。ほらこれだ。

ジヨバンニ これは？

カムパネルラ なにかの化石だね。

学士 蓮の実だ。

ジヨバンニ はす？大きいね。

カムパネルラ 倍あるね。

学士 それはまあ、ざっと百二十万年くらい前の蓮です。ごく新しい方です。振ってごらんころころと音がするでしょ。蓮の実が音をたてているんです。おそらく化石になる前も同じ音がしたにちがいないのです。それはきっと赤ん坊をあやすための玩具として、太古の人類に使われていたんです。大昔の人類がそんなことをしたのかといぶかしんではいけません。人類は生まれてきたときから人類だったのだから、子供に乳もやれば、イナイナイバアもやつたに違いありません。プリオシン海岸というのは、いま行くと透明な川と切り立った崖つぶちだけれど、第三紀の頃は海岸でね、そこからは貝がらも出る。白い柔かな岩がいつぱいで、そこから大きな大きな青白い獣の骨が出る。それはポストといってね

、いまの牛の先祖です。(助手に) おいおい、その突起をこわしちや駄目だ。スコップを使いなさい、スコップを。もう少し遠くから、そおつとそおつと掘るんです。

カムパネルラ ここにも何かいるんですか。

学士 訓練です。おいおい、つるはしはよせと言ってるんだ。そこは鑿(のみ)だ。ていねいに鑿でやるんだ。

カムパネルラ これ、もらつといていいんですか。

学士 はいよろしい。ところでえーと、助手、君たちも台詞なしでただここに出てるのはつまらんだろう。ちよつと時間をあげよう。歌でもうたつてごらんなさい。

助手 1、2も歌おうとするが、

学士 と、言いたいところだが、残念だな。君たちがいくら歌っても、君たちに払うギャラはない。まさか考古学士の助手の歌に払うギャラを、必要経費として認めてくれる税務署はありはしないだろうからな。さあ、また仕事だ。

助手、また掘り始める。

学士 おいおい助手、何度言ったら分かるんだ。そこはスコップではいけない。そのすぐ下に死体が埋もれていたらどうするんだ。このあいだなんか、桜の木の下を掘ってたら死体が出てきたんだからな。アルケオロジ(考古学)といえど何でも掘ればいいってもんじゃないんだ。ところで(と、時計を見て) 汽車が来るまでにはまだ時間があるな。よし、こんどはあつちの崖の下を掘ろう。

助手 1、2 先生、また崖がくずれてきたら、どうするんですか？

学士 そのときは、埋もれて化石になるまでです。

行ってしまった。

9 熊を撃つ人

——ここへかけてもようございますか。

とつとつした、けれども親切そうな声でした。ジョバンニとカムパネルラが振り返ると、素肌になめした皮のチョッキを着て、ボロ雑巾のようなズボンを穿いた男が、肩からポルトガル伝来とも思える鉄砲を下げ、腰に蛮刀などさして立っている。

ジョバンニ ええ、いいですよ。

男 汽車はまだ、来ねえですね。

ジョバンニ うん。(カムパネルラを見る)

カムパネルラ ええ、まだ来ません。

男 すんません。汗臭えんでご迷惑でしょうが、汽車に乗るのは初めてだもんで、どうか

ご一緒させておくんさい。

ジョバンニ はい。(カムパネルラを見た)

カムパネルラ あなたはどこへ行くんです？

男 おら？おらは猟師ですから熊を撃ちに行くんです。淵沢川の小十郎といいます。よろしくおたの申しますでやす。

カムパネルラ 熊を撃つんですか。

小十郎 へい。こいつでズドンです。

カムパネルラ どうして熊なんか撃つんです？

小十郎 それは、おらの仕事なもんですから。

カムパネルラ へーえ。

カムパネルラはこの男があまり好きではないらしい。

ジョバンニ (小声でカムパネルラに) 野蛮だよねえ。

カムパネルラ え、ああ、うん。

ジョバンニ 熊なんか殺していると罰が当たるよね。(と、またカムパネルラに)

小十郎 へい。それはもうよく分がってるんです。でも、憎くてやってるわけでねえんです。

ジョバンニ ごめんなさい。聞こえちゃった？

小十郎 へい。耳がいいもんですから。

ジョバンニ どうやって、撃つの？

小十郎 犬こ連れて、山歩いて、．．しどけ沢から三つ又からサツカイの山から、マミ穴森から白沢まで、へい。あの辺りはおらの座敷のようなもんですから。その犬ことというのが、おらの嬢と息子が赤痢で死んだ時も生きのびた丈夫なヤツで、先に立って崖を横這いに走ったり、ざんぶと川に飛び込んだりして、おらを待ってるんです。それを熊のヤツは高いところから見てるです。木の上から両手で枝にとりついたり、崖の上で膝あ抱えて座ったりして(笑った)おらも熊が好きだけど、熊のヤツもおらやその犬こが好きみてえで、へい。んでも、出会っちゃまうとこいつでやっぱり撃たねばなんねす。

カムパネルラ 好きなのに、撃つて殺すんですか？

小十郎 へい。おら、だから、いつもおらに撃たれて横たわっている熊に言うだ。おい熊、おらな、てめえが憎くて殺したんでねえんだぞ。おらも商売ならてめえも射たなきやならねえ。ほかの罪のねえ仕事をしてえんだが、畑はなし、木はお上のものにきまつたし、里に出ても誰も相手にしねえ、仕方なしに猟師なんぞしてるんだ。てめえも熊に生まれたのが因果なら、おらもこんな商売が因果だ。やい、この次は熊なんぞに生まれなよ。おらはてめえを殺す。そんなかわり、おらの死ぬときはてめえの手にかかってやら。．．そう言つて熊の胆と毛皮をこいつで切り取るんです。

ジョバンニ 毛皮を売るのが？

小十郎 へい、二枚で二円です。

ジョバンニ ええ、そりゃあ、安い。僕、印刷所のアルバイトで五円もらうよ。

小十郎 へい。それでも、荒物屋の旦那のお情けです。ほんどは売れねえらしいんだけど

、こうやって手えついて頼んで、買ってもらうです。

カムパネルラ きっと騙されてるんだ。きっとその荒物屋の旦那とかにあなた騙されてるんですよ。

小十郎 へい。んでも、家には九十になる年寄りいるし、栗やら稗はとれるけど、米はできねえし、味噌も要りますから。

ジヨバンニ 僕、今度一緒に行つてあげるよ。毛皮なんざ一枚三百円もするんだよ。

小十郎 へい。ありがとうございます。ああ、毛皮はねえけど、ここに熊の胆（い）を持つております。腹痛に効きますから、どうか、もらつてくだせえ。（紙の袋を出した）

カムパネルラとジヨバンニはそれを受け取つた。

小十郎 おらも年とつたですよ。今朝、生まれてはじめて、水さへいるのが、嫌んたよな気がしたです。思えばいろんなこと、ありんした。

母子（おやこ）の熊にあつた時や

おらの臭いがしないよに

音もたてずに戻るですよ

なんしろ 顔があつちまえば

犬こは吠えるし 向こうは立つし

しかたなくなく 撃たねばなんねえ

カムパネルラ （熊の子供の言葉を思い出したように）

どうしても雪だよ おつかさん

谷のこつちが白くなつてる

どうしても雪だよ おつかさん

ジヨバンニ （母熊のように）

雪でないよ あすこだけ降るはずがないもの

カムパネルラ だから 溶けずに残つたんだ

ジヨバンニ いいえ あざみの芽を見に つい昨日

あすこを通つたばかりです

カムパネルラ 雪でなければ きつと霜

ジヨバンニ おかあさまはわかつたよ あれねえ ひきざくらの花

カムパネルラ なあんだ ひきざくらの花なら 知つてるよ

ジヨバンニ いいえ お前まだ見たことありません

カムパネルラ 知つてるよ この前とつてきたんだもの

ジヨバンニ いいえ あれはきささげの花でしょう

カムパネルラ そうだろうか・・・

ジヨバンニ （ほんとの母のことを思い出した）・・・おっ母さん。

カムパネルラ 僕、母さんに会いに行くんだよ。ほんとうの母さんに会いに。

小十郎 おらが銃を構えると、熊が言うだ・・・『お前は何がほしくておれを殺すんだ』

おら、おらな、お前の毛皮と胆（きも）のほかにはなんにもいんねえ。それも町へ持つて行つてひどく高く売れるというのではなし、ほんとうに気の毒だけでもやっぱり仕方が

ない。けれどもお前に今ごろそんなことを言われると、もうおらなんどは何か、栗かシダ
実でも食っていて、それで死ぬならおらも死んでいいような気がするよ。

銃を撃った。

10 ジョバンニの切符

赤い帽子をかぶった背のたかい車掌が、首から双眼鏡を下げていつの間にか立っている。
サーチライトのような明かりが駅をクルクルと照らしだした。

車掌 切符を拝見いたします。

尼僧が切符を出した。車掌はそれを双眼鏡で覗きこんだ。

車掌 サウザンクロスまでですね。次の第三時の汽車でございます。

ジョバンニ ねえ、カムパネルラ、切符買ったの？

カムパネルラ この切符は買わなくても、いいんだよ。

車掌 切符を拝見いたします。

カムパネルラ (切符を出した)

車掌 はい、ありがとうございます。あなたの汽車は第四時です。

ジョバンニ あの、

車掌 切符は？

ジョバンニ えーと、あれ(ポケットに何かさぐりあてた)

車掌 拝見いたします。

ジョバンニ (なんでもいいから、出してしまおう。)

車掌 はい。おや、これは。

ジョバンニ すいません。

車掌 いえいえ、これは三次空間からお持ちになったのですか。

ジョバンニ なんだか、わかりません。

車掌 これは、たいした切符です。どこまでもいける切符です。

ジョバンニ ？？？

カムパネルラ 車掌さん、あのサーチライトのような光は何ですか。

車掌 ああ、あれはアルビレオ火山の観測所にある灯台の明かりです。

車掌は双眼鏡でその方向を覗いた。

ジョバンニ (しばし自分が車掌に差し出した紙きれを見ていたが) あっ、これはお父さ
んからきたハガキだ。ラッコの上着を送るって書いてある。ずいぶん前にきたハガキだ。

車掌 あの黒くよこたわっているような建物が、地下水の水の速さをはかる機械でしょう
たぶん。あの、眠るように真っ黒な山がアルビレオ火山です。その頂上に黒い大きな建物

が四棟ばかり立っております。それが観測所です。そのひとつの平屋根の上に、眼のさめるようなサファイアとトパーズの、大きなすきとおった球が、輪になってしずかにくるると回っています。青い球がサファイア、黄色がトパーズです。黄色のがだんだん向こうに回っていつて、青い小さいのがこちらにすすんでくると、まもなく二つの端は重なりあつて、きれいな透明の両面凸レンズのかたちをつくります。それからだんだんまん中がふくらみだして青いのがトパーズの正面に来ると、透明の中心と黄色の明るい環とができません。それがまただんだん横にそれて、前のレンズのかたちを逆にくりかえし、とうとうすつと離れて、サファイアは向こうへめぐり、黄色はこっちへ進み、またちようどさっきのようになります。

車掌はカムパネルラに双眼鏡を渡した。カムパネルラとジョバンニは片目づつで双眼鏡を覗いた。

車掌 ご覧になれますか？

サファイアとトパーズが重なって凸レンズの形を作り、透明の中心と黄色い明るい環とが出来た。・・・溶暗。

11 運河と林檎

そのアルビレオ火山の灯台の明かりも消えてしまつて、カムパネルラとジョバンニは呆つと椅子に座っている。他のものは何処かに消えてしまつている。

ジョバンニ 汽車、まだ来ないね。

カムパネルラ 車掌さんが第四時だつて言つてたね。

ジョバンニ 第四時つて何時なんだろう。

カムパネルラ あれ？

ジョバンニ あ、林檎の香りだ。林檎のにおいがする。

カムパネルラ それから野茨のにおいもする。

すると、黒い洋服を着た青年が、風に吹かれているけやきのような姿勢で立っている。

そしてその傍に十二ばかりの少女が瞳をみひらいて同じように姿をみせた。

少女 ここは駅？ここは何処？きれいなところね。

青年 ええここは駅です。

少女 コネチカット、それともランカシャー？

青年 いえ、ここは駅。コネチカットでもランカシャーでもありません。しかし、私たちはそこから来たのです。

そして天へ行くのです

もう何も怖いことはありません

神さまに召されているのです

さあ、そこにおかけなさい。

少女 (ジヨバンニのとなりに腰掛けるとシクシクと泣きだした)

ジヨバンニ 髪が濡れてるね。カムパネルラと同じだ。

青年 泣いてはいけません。お父さんも大姉さんもすぐにいらつしやいます。

ジヨバンニ (青年の顔を見て) あ、なんだ、ザネリじゃないか。

青年 ザネリ？私、ちがいます。私ザネリではありません。

ジヨバンニ (カムパネルラに) 嘘だい。ザネリだよねえ。

カムパネルラ (青年の顔をみつめる)

青年 ザネリであったかも知れません。ザネリというのは、あなた方のお知り合いの方ですか？

ジヨバンニ 意地悪で嫌なヤツだよ。

青年 ええ、そうです。私は意地悪で嫌なヤツであったかも知れません。人はそうでないように努力するのですが、人の力には限りがあります。そうして幾多の過ちを犯してしまうものなのです。しかし、過ちを犯せば、またその度に神にゆるしを乞えばいいのです。人をゆるすことのできるお方は宇宙にたった一人です。

少女 私たち、船に乗らなければよかったのね。

青年 わたしたちはもう何も悲しいことないのです。わたしたちはこれからずいぶんいいところを旅して、じきに神さまのところへ行きます。そこならもう、ほんとうに明るくておいがよくて立派なひとたちでいっぱいです。そしてわたしたちの代わりにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家やら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出して行きましょう。カムパネルラ あなたたち、どうされたんですか。

青年 船が、船が氷山にぶつかって沈みました。私はこの子の家庭教師にやとわれていたのです。この子のお父さんが急な用事でひと足さきに本国へお帰りになったので、私たちはあとから発ったのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです。船が氷山にぶつつかっていっぺんに傾き、沈みだしたのです。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったです。すぐに救命ボートが降ろされましたが、それも穴があいたり、壊れたりして半分は駄目になっていたので。それでありつたけのゴムボートが膨らまされました。人々は我さきにとゴムボートに乗り移りました。私は必死となつて、どうか子供を乗せてください、どうか子供をお願いしますと叫びました。

ゴムボートに避難したひとたちが出てくる。

青年 お願いしまーす。子供を一人、お願いしまーす。

—— 駄目だ、このボートはいっぱいだ！

青年 近くの人たちはすぐに道を開けてくれましたが、そこからボートのところには、まだまだ小さなこどもたちや親たちがいて、とても押し退ける勇気がなかったのです。それでも私はどうしてもこの子を助けるのが義務だと思いましたが、前にいる子供らを押し

退けようと思いました。けれどもまた、そんなにしてまで助けてあげるよりはこのまま神のみまえに二人して行くほうが、ほんとうに幸福だとも思いました。そのうちもう船はずんずん沈みますから、私たちはかたまって、もうすっかり覚悟して、この人を抱いて、浮かべるだけ浮かぼうと船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイがひとつとんできましたけれども、すべってずうっと向こうへいつてしまいました。私は一生懸命で甲板の格子になったところをはなして、ふたりしてそのブイに取りつきました。そのうち私たちのつかまったブイにたくさんの人がしがみついてきました。どこからともなく三〇六番の声がかりました。

三〇六番のうたごえがあがる。

コーラス ♪『賛美歌三〇六番』

主よ みもとに 近づかん

のぼる 道は 十字架に あり

友など 悲しむべき

主よ みもとに 近づかん

青年 空には星が出ておりました。運河には人がいっぱいいて、僕たちは舟にのることにしたのです。烏うりを運河にながそうと思ったのです。運河で舟に乗るときは気をつけるようにといわれていたのですが、だって、みんな運河の舟に乗っているから大丈夫と思つたのです。それに、星まつりの夜でしたから、みんな気持ちがあつていたので。ボートの上では立ち上がってはいけなさと注意されましたが、僕は思わず立ち上がって、前の子をかきわけました。それから船の舳先（へさき）へ出たのです。

ジョバンニ カムパネルラ、この人は何のはなしをしてるんだい？

カムパネルラ 船が沈んだ話だろ。

青年 でないと烏うりを運河に流すことができないからです。そして烏うりを運河の水面に差し出しました。

ジョバンニ カムパネルラ！この人は何をはなしているんだい。

青年 （ザネリになって）おらおらおら、退けよ。烏うりが流せないじゃないか。どけバカヤロウ。どけつたら。

青年はザネリになってゴムボートに乗り込んでいく。救命ボートの人々は運河に烏瓜を流しにきている子供たちになった。

子供1 ザネリ、やめろよ、ボートがゆれるよ。

子供2 ザネリ、順番だよ。

ザネリ ゆらしてやろうか、おーら、おーら。

ボートがゆれる。

子供1 あぶねえよ。やめろよ。

ザネリ なんだ、情ないやつらだな、おーらおーら。さあ、烏うり流すぞ。それっ、烏うりなつがれるっ。それっ、なつがれる。おーらおーら。あっ！

過ってザネリが落ちた。

子供1 あっ、ザネリ！

子供たち ザネリ、ザネリっ

子供1 ザネリが落ちた！

ザネリ た、たすけて、僕泳げないよう。

黙してカムパネルラが立ち上がった。

子供たち カムパネルラ！カムパネルラ！

ザネリ 俺は泳げないんだあ！助けてくれよおっ

カムパネルラ (突然、意を決してように) お父さんおっ母さん！

子供1 ブイだ。ブイを投げてやれ。

浮き輪が投げられた。

ザネリがそれにしがみつく。

カムパネルラ (じっとザネリ(青年)を見すえて、憶い出したことに震えながら耐えている) 僕はほんとうのことをしたと思う。なのに、何故だ。なぜ、人は死ななければなら
ないんだ。

ザネリ 駄目だあ、ふたりじゃ沈んじゃまうよ。

子供1 ブイはひとつつきりだよ。

カムパネルラ いったい僕はナニモノだ？！

ジョバンニ どうしたんだいカムパネルラ！しっかりしとくれよ。どうしちまったんだい

カムパネルラ！

子供たち カムパネルラ！カムパネルラ！

ジョバンニ カムパネルラ！カムパネルラ！

再び三〇六番が聞こえてきて。・・・暗くなる。・・・

真っ暗な闇の中をサーチライトが滑っている。

・・・明かりがもどると、青年も少女もカムパネルラもジョバンニも、なにこともなかったようにそれぞれ林檎を手にして座っている。

ジョバンニ さつきから林檎の香りがしていたと思ったら、僕たち林檎を持つてるねえ。

少女 何がほんとうの幸せかわからないです。どんなにつらいことでも、それが正しいみ
ちを進む中でできことなら、ほんとうの幸せに近づくひと足ずつなのでしょーうけど。

青年 ああそうです。ただいちばんのほんとうのさいわいに至るために、いろいろのかな
しみもみんなおぼしめします。

カムパネルラ ほんとうのことを御存知なんですね。ほんとうのこととはなんですか？

溶暗。

12 蠍の火

ジヨバンニが林檎と空を交互に見ながら、
ジヨバンニ あれはなんの火だろう。あんなに赤く燃える火は何を燃やせばできるんだろ
う。

カム。パネルラ 蠍の火だ。

少女 ええ、蠍の火です。あたし、知っています。

ジヨバンニ 蠍の火ってなんだい。

少女 蠍がやけて死んだのです。その火がああやって今でも空に燃えているのです。

ジヨバンニ 蠍って虫だろう。

少女 え、蠍は虫です。蠍いい虫です。

ジヨバンニ 蠍いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるのを見たよ。尾に
こんなかぎがあつて、それで刺されると死ぬって先生が言つてた。

少女 そうよ。でも、蠍いい虫です。私、お父さんに聞いたもの。

ジヨバンニ 僕だって先生に聞いたもん。

少女 私のお父さん、先生より偉いもの。

ジヨバンニ そんなことわかるもんか。

少女 私の話をきけば分かるわ。あのね、むかしパルドラの野原に一匹の蠍がいて小さな
虫やなんか殺して食べて生きていたの。するとある日その蠍の何百倍も大きいたちが現
れて、

ジヨバンニ いたちってそんなに大きくないよ。

少女 いたのよそういういたちが。

ジヨバンニ ほんとかなあ。

少女 だって私お父さんに聞いたもの。あのね、身の丈六尺の大いたちってのがいるの。
もう、こおおんなに大きいのよ。

ジヨバンニ いたちってこれくらいだよ。

少女 うううん、これくらい。こおおおれくらいよ。それで、蠍はそのいたちに見つか
って食べられそうになったの。蠍は一生懸命にげてにげたの。野原の中を汗いっぱい
て、

ジヨバンニ 蠍って汗かくの？

少女 あなた、いちいちうるさいわね。蠍が汗なんかかかないことくらい、私知ってるわ
よ。そんな蠍ですら汗をかくくらいに走つたのよ。

ジヨバンニ ああ、そう。

少女 だけど、とうとういたちに押さえられそうになったの。だって、蠍がチョコチョコ
チョココって走つても、いたちはヒョイって追いついてしまうでしょ。

ジヨバンニ うん。

少女 それで、ヒョイって追いつかれたの。

ジョバンニ ねえ、カムパネルラ、この子馬鹿？

カムパネルラ 子供は表現の能力が豊かなんだよ。

少女 そう、そうなの。私、あなたとお話するわ、(ジョバンニに) あんた向こう行つて。(カムパネルラの袖を引っ張つてきて) あなたなら、聞いてくれるわね。

カムパネルラ うん、聞くよ。

少女 そいでね、そのときいきなり前に井戸があつて、蠍その中に落ちてしまったの。深い井戸なの。

カムパネルラ うんうん。

少女 それで、もうどうしてもあがれないで、蠍はおぼれはじめたの。蔦が下がつてたんだけど、それに掴まろうとしたんだけど、蠍って手が鋭になつてるでしょ。だから、蔦草を掴むたんびにプチン、プチンって蔦草がチョン切れちゃうのよ。

カムパネルラ ふんふん。

ジョバンニ ねえ、カムパネルラ、この子やっぱ馬鹿だよ。

カムパネルラ (ジョバンニを相手にしないで) そいで？

少女 そのとき蠍はこう言つてお祈りをしたのよ。『ああ、わたしはいままで、いくつのものの命をとつたかわからない。そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生懸命にげた。それでもどうとうこんなになつてしまった。ああなんにもあてにはならない。どうして私は私からだを、だまっていたちにくれてやらなかつたらう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらんください。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次には、まことのみんなの幸せのために私からだをおつかいください』そしたらいつか蠍はじぶんのからだを、真っ赤なうつくしい火になつて燃えて、よるのやみをてらしているのを見たつて。あの火、そうだわ。

青年 ハレルヤ、ハレルヤ。

カムパネルラ 蠍座のアンタレスだ。

少女 ハレルヤ、ハレルヤ。

カムパネルラ ケンタウル、露を降らせ。

三人、歌いだした。

η空のはてに 浮かぶクルスは

やさしい 母の微笑みに 似て

その白きうなじに 光る十字架は

熱き愛にあふれ 深き慈悲にあふれ

ああ 輝くは 輝くは 南十字星

ジョバンニ (独り言) 何だ、カムパネルラなんか、あんな女の子と仲良く歌なんか歌つたりして。僕、せつかくここへ来たのに。僕を呼び出しておいて、カムパネルラは僕のことをどう思つてるんだらう。汽車、まだ来ないのかな。

車掌 第三時の汽車にお乗りの方はお急ぎください。
尼僧 行きましょう。私たちの乗る汽車がきます。

いつのまにか、あの尼僧や考古学士、熊撃ちと車掌がもどってきた。

青年 はい。したくはいいですか。

少女 はい。(と、名残おしそうにジヨバンニとカムパネルラを見た)

ジヨバンニ もう、いっっちゃうのかい。

少女 はい。

ジヨバンニ その人といっしょにかい。

少女 はい。

尼僧 私もいっしょです。

ジヨバンニ ねえ、僕たちと一緒に行こうよ。ね、カムパネルラ。

カムパネルラ ……。

少女 (青年の顔を見た)

青年 それはできません。私たちは天上へ行くのですから。

ジヨバンニ 天上なんていかなかったっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりも、もつといいところをこさえなきやいけないって僕の先生も言ってたよ。

少女 だって、お母さんも行ってらっしゃるし、それに神さまがおっしゃるんだもの。

ジヨバンニ そんな神さまうその神さまだ。

少女 あなたの神さまうその神さまよ。

ジヨバンニ そうじゃないよ。

少女 あなたの神さまってどんな神さま？

ジヨバンニ よく知らないけど、ほんとうのたった一人の神さまです。

尼僧 ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。

ジヨバンニ ああ、あの、そんなんでなしにその、たった一人のほんとうのほんとうの神さまです。

青年 会いましょうまた。そのたった一人のほんとうの神さまの前で。

少女 じゃさよなら。

ジヨバンニ さよなら。

みんな行ってしまった。

ジヨバンニ 行っちゃった。…ねえ、カムパネルラ、僕たちは一緒に行くんだよね。

カムパネルラ うん。

ジヨバンニ だって、僕のキップはどこまでも行けるキップだって車掌さん、行ってたもの。僕たち、何処までも一緒にいこうね。

カムパネルラ ああ。

もうすっかり夜はふけた。

ジョバンニ 理科の先生が言ったよねえ、この宇宙に生きている生物は地球の上のぼくたちだけだつて。ぼくたち、死んだらどうなるんだろうか。

カムパネルラ・・・むかしむかし。

ジョバンニ あるところ、に？

カムパネルラ あるところにより、もつと昔。いまから百五十億年の昔。空にまだなにもないときに、ビッグバンという大爆発があつてそれでいまあるなにもかもが生まれたんだつて。だからこの宇宙にあるものはもとはみんなおんなじなんだつて。ぼくたちもあの星も同じ炭素体なんだつて。みいんな大爆発のときのカケラなんだつて。いっしょなんだよ、星もぼくたちも。ぼくたちは、もともと星のカケラなんだよ。だから、死んだら空にもどつてこんどはべつの星になるんだきつと・・・ジョバンニ、ぼくたちは化学を習つたよねえ。

ジョバンニ ああ、習つたよ。

カムパネルラ ぼくたちは水が酸素と水素からできていることを知っている。いまは誰だつてそれを疑いやしない。実験してみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできていると言つたり、水銀と硫黄でできていると言つたりいろいろ議論したんだ。みんながめいめい自分の神さまがほんとうの神さまだと言うだろう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしぼくたちがほんとうに勉強して実験でちゃんとほんとうの考えと、うその考えを分けてしまえば、その実験の方法さえ決まれば、もう信仰も化学と同じようになる。いろいろな人がいるいろんなことを考えている。哲学で考える人もいれば、数学で考える人もいる。思想の人もいるし宗教の人もいる。でも、不思議なことにみんなそれぞれが違ったコトバで同じことを言っているんだ。きつとみんな、ほんとうのことが知りたいんだ。

ジョバンニ ほんとうのことつて？

カムパネルラ ほんとうのことだよ。

ジョバンニ ほんとうのことか・・・

カムパネルラ 僕もほんとうのことが知りたいと思う。きつと人間はその答えを知る時がくると思う。そうしたら、今まで泣いたことや、苦しんだことや、辛かったことや、切なかつたことや、悲しかったことや、分かつてもらえなかつたことや、耐えたことや、悩んだことや、どうしようもならなかつたことが、いっぺんに分かるはずだ。きつと、きつと分かるはずだ。ほんとうに分かるはずだ。

カムパネルラは椅子に駆け上がった。ジョバンニもそうした。そうして、指揮者のように手を構えた。何処からか、勇気の沸いてくるような音楽が始まり、彼らはそれを指揮し始めたのである。が、急に辺りが暗くなつてきて、・・・

ジヨバンニ あつ、あそこ石炭袋だ。空の孔だよ。

ふたりは天の川のひととこにある大きな真つ暗な孔を見た。その、ブラックホールの底がどれだけ深いのか、その奥に何があるのか、いくら眼をこすつても何もみえない。

カムパネルラ ブラックホールだ。

ジヨバンニ 僕はあんな大きな暗（やみ）の中だつて恐くないぞ。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行くんだ。

カムパネルラ ああ、僕だつてきつと行くよ。

車掌がでてきた。

車掌 第四時の汽車にお乗りの方は準備ねがいます。ただいまから改札をはじめます。

カムパネルラ 行かないや。

ジヨバンニ うん。

カムパネルラは車掌に切符をさしだした。車掌がハサミをいれる。

ジヨバンニも切符をさしだしたが。

車掌 ああ、この切符はちがいます。これは三次空間のものです。

ジヨバンニ え？どうということ？

車掌 この切符はまだなのです。

ジヨバンニ まだだつて、さつき、これでどこまでもいけるつて言ったじゃないか。

車掌 はい。しかし、それはまだなのです。

ジヨバンニ カムパネルラ・・・

車掌 この人はあなたのお友達ですね。この人は今夜遠いところに行くのです。

ジヨバンニ 僕もいっしょに行くんです。

車掌 それはできません。

ジヨバンニ そんな。カムパネルラ、僕、君といっしょにまっすぐ行くんだよねえ。

カムパネルラ ジヨバンニ。いっしょに行けない。でも、みんながカムパネルラだ。君のであうすべてのひとがカムパネルラだ。

ジヨバンニ 何をいつてるの？カムパネルラ。

カムパネルラ いつてくるよジヨバンニ。ジヨバンニ、僕はいつてくるだけだ。

車掌 汽車がきました。

ジヨバンニ カムパネルラ！

カムパネルラ ジヨバンニ、おつ母さんのミルクを忘れないようにね。

カムパネルラ、車掌、行つてしまった。

汽車が出る。

ジヨバンニは一人とり残されて・・・

ジヨバンニ カムパネルラ・・・カムパネルラ！

・か空の彼方から、汽笛が哀しく聞こえる。
暗転。

15 エピローグ

青空教室。宮沢先生が大きな牛乳壺を抱えて座っている。

ジヨバンニが入ってきた。

ジヨバンニ あれ、僕が一番かと思ったのに。

教師 ああ、ジヨバンニ君。

ジヨバンニ 先生はこんなところで何をしてるんですか。

教師 ジヨバンニ君に届けものがあるんです。私は君を待っていたんですよ。

ジヨバンニ なんですか？

教師 牛乳です。わざわざ牧場の方が、あなたにと、届けてくださったのです。

ジヨバンニ ああ、それはすいません。

教師 それでは、私は行きます。

ジヨバンニ はい。

教師 ……ああ、ジヨバンニ君。…カムパネルラ君はほんとうに残念なことをしました。でも、悲しまずに、一生懸命やりましょうね。

ジヨバンニ はい。

教師 とても不思議なことです。

ジヨバンニ え？

教師 ひとがいなくなる。昨日まで、さっきまでいたひとが、突然いなくなる。もうこの世界の何処にもいないように、いなくなる。それはとても不思議なことです。

ジヨバンニ カムパネルラのことですね。

教師 みんな、そうです。…私は、人が生まれ変わったり、あの世へ行ったり、そうするものだと、思っていました。でも、違うんです。

ジヨバンニ 違うって？

教師 はい。いなくなりはしない。誰も消えてなくなりはしないんです。

ジヨバンニ どういうことですか？

教師 いるのです。ちゃんと、いるのです。

ジヨバンニ 何処に？

教師 それを、考えるのが、科学だと、先生は思うのです。…それでは・・・

生徒たちが入ってきた。ザネリもいる。昨夜の運河の事故の話をしている。

ザネリ ほいでよ、ほんとは俺は泳げるんだけどな、ちよつとびっくりさせてやろうと思つてよ。、ほら、俺はサービス精神が豊富じゃん。だから、わざと、助けてくれー、助けてくれーなんて言つてさ、手足をこうやってバタバタしてやつたらよ、カムパネルラのやつマジになりやがつてさあ、飛び込むんだもん。

生徒 あいつ真面目だもんなあ。

ザネリ バカだぜあれは。そいでよ、ブイに二人してつかまったらよ、ブイが沈むんだ。カムパネルラだつて泳げもしないのによお。

生徒 でも、カムパネルラが手を離れたから、おまえ助かったんだろ。

ザネリ 違うよお。あいつ力がないもんだから、自分で滑って沈んじゃつたんだ。お父さん、おつ母さんなんて言つてよ。

生徒 海難事故にあつたときにさ、板の切れ端に二人してしがみつくんじやない。そういうときつて、自分が生き残るために相手を蹴落としても罪になんないんだつて。

生徒 へーえそう。

生徒 法律でそうなつてんの。

ザネリ 俺、罪なんかないもん。

ジョバンニが何か言おうとしたその刹那、鐘がなつた。遅刻しそうな生徒があわてて入ってくる。

生徒 おお、遅刻だ遅刻だ。

女の先生がきた。

起立、礼……

教師 では、きょうは次にすすむ前にこの前のお復習をしておきましょう。天の川と呼ばれたり、乳の流れる川と呼ばれたりしているものは、ほんとうはいったい何でしょう。

ジョバンニ はい！

教師 はい、ジョバンニさん。

ジョバンニ 銀河です。たくさん星の集まりです。

教師 よろしい。そのとおりです。

ジョバンニ へびや瓶や白鳥あります。蠍あります。ケンタウルスあります。ケンタウルス露を降らせませす。

教師 はいそうです。

ジョバンニ つる、あります。いるかあります。くじらあります。天気輪の駅は、銀河ステーションです。すすき銀色です。りんどうの花咲いています。考古学者、プリオシン海岸あります。南十字サウザンクロスあります。シスター、スイングしながら踊りました。二百万年前の化石の蓮の実コロコロと音がしました。熊撃ち、腹痛の薬くれました。アルビレオ火山あります。観測所あります。サファイア、トパーズ回っています。女の子、さそりのはなしをしました。蠍、いい虫です。空で燃えています。銀河鉄道、銀河の南の端に走っています。……昨夜、第四時の汽車でカムパネルラ、行きました。

教師 はい、そのとおりです、ジョバンニさん。

汽車の汽笛が聞こえる。そして、あの冒頭の無線交信も小さく聞こえる。汽車が走っている。はるか頭上を。先生も生徒もジョバンニもそこにいるものはみんな、空を静かに見上げた。

ジョバンニ カムパネルラ、ほんとうのことをさがしに行きました。僕たちもほんとうのことをさがします。ここでさがします。みんな、みんなカムパネルラです。(空に向かって手を振った)カムパネルラ、行っておいで！

♪南十字の星 輝いて

汽車は はるかに 宇宙(そら)をゆく

カムパネルラを乗せて

遠く 宇宙の果てまで

地球ステーションから 銀河の世界へ

汽車はゆく 闇さえ おそれずに

銀河の彼方へと 旅だつていく

銀河鉄道の夜 銀河鉄道の夜

カムパネルラ いっておいで

カムパネルラ いっておいで

ぼくも いつかきつと

君のところに いこう

教室は真つ暗になり、銀河鉄道の車窓から零れる光だけが教室を通り過ぎていく。その光にジョバンニも生徒たちも手を振っている。

END

初稿後書き

この作品は一読すればお分かりのように、宮澤賢治「銀河鉄道の夜」「ブルカニ口稿、第四次稿」の翻案であります。

この度これに「想稿」と付し、私なりに劇化(戯曲化)いたしました。賢治の研究者、愛読者諸氏には、御容赦賜りますようお願いする次第です。(作者)

リビイジョン後書き

作品をほぼ四年ぶりに改訂したのは、幸いにして再演を熱望する声が多く、それに答えんと考えたためです。もちろん劇団を構成するメンバー(登場人物)の都合もありますが、初稿の上演時における演出による変更なども書き加え、また拙いと思えるところを書き直しました。

ver3. 1後書き

レビュージョンをさらにミュージカル・バージョンに書き改めたのち、このほど、ver3
・1として、改訂加筆いたしました。

参考文献ならびに資料

『銀河鉄道の夜』宮澤賢治（角川文庫）

『宇宙ステーション1992』中富信夫（新潮文庫）

『宇宙』加古里子（福音館書店）

『宇宙と星』（産報）

『宮沢賢治』吉本隆明（筑摩書房）

『教師宮沢賢治のしごと』畑山博（小学館）

『なめとこ山の熊』（新潮文庫）を翻案使用いたしました。